教育保健
Japanese Association of Health and Education
1
日本教育保健学会ニューズレター第９９号
2025年　9月 1日発行

第 22 回年次大会を終えて

日本教育保健学会 第 22 回年次大会長
兵庫大学　大平 曜子

３月１日（土）・2 日（日）に兵庫大学において開催いたしました日本教育保健学会第 22 回年次大会は、皆様のお蔭をもちまして無事終了いたしました。理事・学会員の皆様、ご参加くださいました皆様に心より御礼申し上げます。大会の開催にあたっては、学会理事長の植田誠治先生、学会事務局、理事の先生方のご支援ご指導をいただき、また、副大会長を務めてくださった加古川市教育委員会の尾崎貴弥先生をはじめ、事務局長の米野吉則先生の呼びかけに応じてくださった 12 人の実行委員の精力的な活動に支えられ、盛会のうちに終えることができましたことは、この上ない喜びです。

関西圏で年次大会が開かれるのは久し振りとあって、兵庫大学で開催できることを光栄に感じ、参加者の皆様の交流がより深まり、新たな知のネットワークが生まれ、関西での学会発展に貢献することも本大会の目的の一つでした。

１日目の聖カタリナ大学の山本万喜雄先生の教育講演は、演題どおり「人間讃歌」にあふれた心に響くご講演でした。続くシンポジウムは、地元小学校で長きにわたって実施してきた「命の学習」の実践を基に、養護教諭、担任教諭、管理職、こどもの立場からご発言をいただき、本大会のメインシンポジウムとしての役割を果たしていただいたと思います。2 日目の一般発表は、2 会場に分かれて 10 演題の発表が行われ、活発に意見交換ができ、交流が深まったようです。午前の部の特別講演は、兵庫大学の朽木勤先生に Well-being から学校の健康経営を考えると題して、わかりやすくお話をいただきました。午後の最終は学会研究委員会企画で、きのくに子どもの村学園の堀学園長のご講演でした。ご登壇いただきました先生方、本当にありがとうございました。そして、熱心に視聴しご参加いただきました皆様に、実行委員会を代表して感謝申し上げます。

今回の年次大会は、「健康な文化・風土を生きる―教育保健の可能性―」をテーマに異なる視点からさまざまなお考えを拝聴でき、参加された皆様もさまざまな感慨をもってお帰りになられたことだと思います。ランチョンセミナーで学会理事長の植田先生より教育保健についてお話しいただき、教育保健学会に興味を持たれた方も増えたのではないかと思っています。本学会の魅力を大会を通じて感じていただき、今後さらに多くの方々に関心を持っていただければ幸いです。本大会には、61 名の方々から参加申し込みをいただき、当日参加者も含めて 70 名の皆様が兵庫大学にお越しくださいました。2 日間にわたり、同じ空間を共有し、久し振りに語り合い、親睦を深める機会となりましたなら、会場校として嬉しく思います。不付き届きのところも多々あったと思いますが、実行委員だけでなく、各演者と座長の先生方で補っていただき、大過なく終えられましたことは何よりの喜びです。改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

次回大会にて皆様とお会いできることを楽しみにしております。

大会長講演

「健康な文化・風土と人間形成」と題した大会長講演が、大平曜子氏（兵庫大学　教授）により行われました。現代社会の多様な環境変化が子どもたちの心や生活に与える影響を考察しつつ、真の「健康」とは何か、そしてそれを育むための文化や環境のあり方について深く掘り下げられました。

大平氏は、健康を単なる環境への受動的な適応ではなく、「健康を創造する」、「生きる健康」と定義されました。これは、困難を乗り越え、小さな喜びを噛み締めながら日々を暮らす、主体的な生き方を指します。人間性心理学の観点から、与えられた環境に抑え込まれるのではなく、環境を見極め、積極的に関わっていく主体としての健康が強調されました。

健康な人間形成、そして健康な文化を創造するためには、「人間らしさ」「つながり」「本来の自分」「ワクワク感」「チャレンジする力」。最後に、「寛容と謙虚さ」が挙げられました。これは文化や価値観の多様性を理解し認め合い、変化を恐れずに知識を得て、積極的に変化を求めていく姿勢が重要であると論じられました。

教育に携わる者として、子どもたちが持つ本来の力（法則性）を認め、励まし、育むことが肝要であると述べられました。学校の文化は、教師が子どもたちへの深い愛情と揺るぎない信念を持って教育を行う中で形成され、このような環境が子どもたちの健全な成長を支える基盤となると締めくくられました。

教育講演

第 22 回年次大会にて、山本万喜雄氏による教育講演「健康と文化をつなぐ人間讃歌の教育保健実践」が行われました。山本氏は、講演の冒頭で詩を紹介し、自身の声が聴き手に届いているかを確認しながら話を進めることで、聴き手と「ともに育ち合う」関係を重視する姿勢を示されました。

山本氏は 1969 年、定時制高校教師として教育実践を開始しました。ここでは、低賃金で危険な労働に従事する生徒たちに対し、「遅れるな」ではなく「遅れてでもよく来たね」、「給食でしっかり栄養を摂ろう」といった「管理と共感」の二つの目で生徒を見守る経験が、健康観形成に大きな影響を与えたと語られています。

1974 年からは愛媛大学で「未来の教師」へ教鞭をとり、山田洋次や山田太一の作品に触発され、「人間らしく生きること」「命を大切にすること」を教育の中心に据える「人間讃歌の健康教育」と、深く、確かにおおらかに伝える「喜怒哀楽の教授法」を模索されました。また、現代の教師が教材研究の糧とするために、読書や観劇など「文化」に触れ、人間観を深める時間を確保することの重要性も提言されています。

さらに、「未来の養護教諭」への指導や地域の子育て支援活動を通じて、親の高学歴に伴う「教育家族」の問題や、子どもの手のつなぎ方から見えてくる「要求の二重構造」といった、丁寧な人間理解に基づく親子の関わりの重要性を伝えられました。

山本氏の教育研究の背景には、友人の自死、学校での熱中症死亡事故、阪神・淡路大震災での養護教諭の活動という3つの生きる悲しみがありました。これらの経験から「何をしたか」だけでなく「何をしなかったのか」を問うことの重要性を説き、「いのち・発達・人権・共生・平和」の観点から「健康は平和の中でこそ」という強いメッセージを発信されています。本講演は、「社会を捉え、その中に生きる子どもたちを捉える」という学校保健の本質を再認識させ、子どもの育ちに関わる支援者としての視座を深める、まさに「ともに育ち合う」貴重な時間となりました。

シンポジウム

第 22 回年次大会のメインシンポジウムは、「健康な文化・風土を育むための『命の学習』の実践」をテーマに、子どもたちを取り巻く課題が深刻化・多様化する中、健康な教育環境の重要性を再考するものです。本シンポジウムでは、加古川市立鳩里小学校での「命の学習」実践を紹介し、命の大切さを伝え、尊重する態度を育む方法を検討しました。シンポジストは、谷口知子氏（加古川市立鳩里小学校　養護教諭）、平田真理氏（同　教諭）、尾崎貴弥氏（加古川市教育委員会　参事）、玉垣琴葉氏（加古川市立義務教育学校両荘みらい学園　養護教諭）です。コーディネーターは、若井和子氏（兵庫大学　教授）と梅田裕之氏（加古川市立鳩里小学校　養護教諭）が務めました。

鳩里小学校では、前任養護教諭の実践を受け継ぎ、学校全体で「命の学習」に取り組んでいます。養護教諭がコーディネーターとして主導し、子どもたちが命の希少性と重要性を実感し、自他の命を尊重する態度を育むことを目的としています。この学習は性教育に留まらず、人権教育や生命の安全教育等の多角的な側面を持ち、全学年で発達段階に応じた系統的なプログラムが組まれています。1 年生では命の誕生、高学年では性の多様性などを学ぶなど、発達段階に応じた内容です。

シンポジストからは、谷口先生が男女複数養護教諭の協力による抵抗感軽減と多様性理解促進の実践、平田先生が 1 年生からの継続学習が子どもの真剣な姿勢と自己肯定感向上に繋がると報告しました。尾崎先生は、自己肯定感の重要性を指摘、本学習を学校経営方針の柱とし持続可能性を高めていると述べました。元児童の玉垣先生は、幼少期からの学びが命の奇跡や自他尊重の感情、自身の存在肯定に繋がったと振り返りました。

討論では、保護者から否定的な意見はなく、保健だよりによる継続的な情報発信が保護者に安心感を与えていることが示されました。また、継続の秘訣として、養護教諭のリーダーシップ、担任教諭との協働、そして管理職による支援の重要性が明らかになりました。

特別講演

朽木勤氏（兵庫大学　教授）による特別講演「“身体からこころへ”Well-being から学校の健康経営を考える」は、個人の健康増進が組織、ひいては社会全体の幸福に繋がるウェルビーイングの重要性を多角的に論じられました。

講演は、朽木氏の教員養成大学での学びとフィットネス業界での経験から、「一人ひとりの変化」を重視する視点で始まりました。健康経営は、経済産業省が 2014 年に開始した取り組みで、従業員を「コスト」ではなく「投資」と

捉え、企業の生産性向上と価値創造を目指すものです。この概念は、SDGs や働き方改革を経て、身体・精神的健康に加えて幸福感や生活満足度といった主観的要素を重視するウェルビーイング経営へと発展しました。文部科学省も教育現場にウェルビーイングの視点を導入しており、GDP から GDW（Gross Domestic Well-being）への指標転換の必要性が強調されました。

さらに日本人の長時間座位（平均約 7 時間）がもたらす健康リスクが指摘され、30 分に 1 回立ち上がる、お尻を 1cm 浮かせるなどの簡単な身体活動が推奨されました。また、幸福度を測る VAS、K6、ワークエンゲージメント等の主観的指標が紹介され、軽い運動でもメンタルヘルスに好影響を与える可能性が示されました。朽木氏は、「身体からこころへ」という視点を通じ、個人のウェルビーイングが組織・社会の活力に不可欠であること、そして感謝の心が幸福感を高めるという示唆を与え、今後の健康教育・組織運営を考える貴重な機会となりました。

米野吉則（兵庫大学）

第 22 回年次大会 研究委員会企画講演の報告

2025 年 3 月 1 日・2 日に開催された第 22 回年次大会の 2 日目には，研究委員会企画として，堀　真一郎 氏（きのくに子どもの村学園理事長）に「体験学習で学校を変える」とのテーマでご講演いただきました．きのくに子どもの村学園は，5 つの小中学校と，1 つの国際高等専修学校を設置し，小中学校は学年，宿題，試験，通信簿，廊下が存在しないことや，学校に関するルールやトラブルの解決方法を子どもも教員も同じく一票をもって参加する「ミーティング」によって決めていることで知られる学校です．

講演は，堀先生が世界一自由な学校で知られる「サマーヒル・スクール（England, Leiston)」を創立した教育家の A.S.ニール（Alexander Sutherland Neill）と，プラグマティズムの立場から経験主義教育を提唱したジョン・デューイ（John Dewey）の影響を受けたとのお話から始まっていきました．堀先生が，大阪市立大学で勤務されていた頃，子どもたちに「学校で一番楽しいのは？」と尋ねたところ，授業を一番楽しいと答える子どもがあまりにも少なく，学校を作ろうと思うに至ったとのことでした．

余談ですが，この話の辺りで会場に携帯電話の着信音が鳴り響きました．1 秒，2 秒，3 秒と着信音が鳴る中で，司会であった私は「堀先生が怒ってしまうのでは…」と恐る恐る視線を堀先生に向けました．心配は無用でした．堀先生の携帯が鳴っていたのです．一安心と思った次の瞬間，「もしもし」と会場スピーカーから堀先生の声が聞こえました．通話開始です．「〇〇ちゃん．ごめんね，今大学で講演中なんだ」と堀先生はやさしく電話を切りました．そして，「姪でした．緊急の連絡だと出ないのは良くないから」と一言．確かに．その後，講演は後半に入っていきます．

後半は，子どもの村学園の基本方針や特徴的な「プロジェクト」の実施についてお話いただきました．学園の基本方針には，子どもがいろいろなことを決める「自己決定」，一人一人の興味や違いを大切にするといった「個性化」，実際の体験や生活を学習の中心とするといった「体験学習」を挙げていました．3 つの基本方針の中核にあたるのが「プロジェクト」で子どもたちは，表現・木工・食・農業等から自分の取り組みたいプロジェクトを選択して活動していました．強調されていたのは，プロジェクトで取り組むものは“ホンモノ”の仕事じゃないといけないということです．服を作るなら，普段から着られるものを．カフェを作るなら，保健所の基準を満たすものを．本を作るなら，出版もする．等々，作ること・すること自体をゴールにするのではなく，“ホンモノ”を作る・する体験にこだわっているとのことでした．“ホンモノ”の作業をしていく中で，子どもが「基礎学習（いわゆる普通の学校の教科授業に相当）をしておくと，プロジェクトの時にお得だぞ」と気づいていくとのお話は，本質的な学びがどんなものか？の一つの答えであったように思っています．

講演をお聞きしながら，子どもが求める，または必要な教育・環境はどんなものだろうか？と頭を巡らせていました．ただ，悩む必要はないのかもしれません．私も，外遊びの中で虫に出会い命を知り，夕立に打たれ天候を知り，帰宅後の入浴で清潔を知り，布団で寝て回復を知ってきました．普段の生活にあふ

れる“ホンモノ”を子どもと再体験するとともに，意味を再思考すれば良いだけかもしれません．携帯電話は，SNS で気を滅入らせたり，視力を落としたりするものではなく，緊急の連絡にすぐ出るためのものでした．いつの間にかズレてしまった？何かに気づく構えが重要なのかもしれないと感じられる貴重な機会となりました．お話いただいた堀先生にこの場を借りて感謝申し上げます．

田中　良（日本体育大学）

日本教育保健学会第２３回年次大会のご案内（第１報）

大会テーマ

教育保健の視点で発想する子どもの育ちと学び～GIGA スクール構想と教育保健

1.開催日時:2026年 3月 20日（金祝）・ 21日（土）
2.会 場:東洋大学赤羽台キャンパス（〒115-8650 東京都北区赤羽台1丁目7−11）
3.年次大会長: 内山有子（東洋大学健康スポーツ科学部 教授）

このたびは、日本教育保健学会第 23 回年次大会を東洋大学（東京都北区）にて開催することとなりました。

大会テーマは実行委員会で話し合い「教育保健の視点で発想する子どもの育ちと学び～GIGA スクール構想と教育保健～（仮）」を仮案として考えています。コロナ禍に急速に進められた「GIGA スクール構想」をはじめとする教育環境の変化が、子どもたちの育ちと学びにどのような影響を与えているのか。教育保健の視界から検討できるような内容を考えています。

ぜひご参加いただき、活発な議論ができることを期待しております。

●●●

編集委員会からのお知らせ～「日本教育保健学会誌」への投稿を募集しています！

下記の「投稿要領」をご確認の上,ご投稿ください.みなさまからの多くの投稿をお待ちしております.

日本教育保健学会誌 第 33 号への投稿要領

〔１〕 投稿原稿は，Word と PDF の２つを記憶させた電子データ（２部）をメールで送付する．

〔２〕 １部（正）には表紙をつけ，①表題，ランニングタイトル（和文の場合は 40 字以内，英文の場合は 20words 以内，著者名，所属機関名，抄録，５つ以内のキーワード（以上，和英両文），②代表者の連絡先（必ず電子メールアドレスを記す），③図表の数，④希望する原稿の種類，⑤別刷必要部数（但し費用はすべて著者負担）を明記する．残りの１部（副）は査読者に送付するため，①表紙は表題，ランニングタイトル，抄録，５つ以内のキーワードのみ（和英両文），②本文に行番号〈連続番号〉をふること，③投稿者の個人情報を掲載しないこと．

〔３〕 投稿原稿については，論文中に「拙稿」「拙著」「筆者の既発表論文」あるいは「科学研究費番号」などの表現や研究助成，共同研究者への謝辞など，投稿者が判明するような記述を行わないこと．

〔４〕 投稿料として 2,000 円を納入し，納入の証書（PDF）を投稿原稿送付時にメールで送付すること．郵便局で「振込取扱票」を利用し，次の内容を記入する．

口座番号：00170-9-451310　　加入者名：日本教育保健学会

通信欄に①投稿料，②住所・氏名・電話番号

〔５〕 投稿論文の受付は，通年行う．査読終了時には，「掲載決定」を執筆者に連絡する．第33号に掲載を希望する場合は，2025年9月30日（火）までに投稿すること．

〔６〕 本学会HPに掲載された電子データ用執筆書式をなるべく活用すること．

〔７〕 原稿の送付先

問い合わせ先　日本教育保健学会編集委員会事務局

E-mail：gakkaishi@educational-health.jp

◆◆

日本教育保健学会役員選挙について

公　　示

日本教育保健学会会則第９条及び日本教育保健学会役員選出規則第4条により，第９期（任期：2026年4月～2029年3月）役員の選出について次のように公示する。

(1)役　　員：理事

(2)選 出 人 数：10名

(3)選 挙 権 者：選挙公示日前に在籍する会員

(4)被選挙権者：選挙公示日の前年度以前に入会し，引き続き在籍する会員

(5)期　　日：2025年10月31日（金）〆切（消印有効）

(6)投　　票：所定の投票用紙を使用し，所定の手続きに従い郵送により投票する。

有権者には被選挙権者の名簿を添えて10月初旬までに投票用紙を送付する。

2025年９月１日

日本教育保健学会選挙管理委員会

委員長　下里　彩香

委　員　鈴木　世津子　鈴木　裕子

◆◆

事務局より 2025年メールアドレス等登録、住所・所属等変更届の提出及び年会費納入のお願い

昨年度より**ニューズレターをメール配信へと移行しましたので、メールアドレスの登録をお願いいたします**。また、住所や所属などが変更となり、郵便物が届かない会員の方が散見されます。**郵便物が届いていない会員の方は、住所・所属等変更届を事務局までメール添付にて提出をお願いいたします**。学会運営にご理解とご協力をお願い申し上げます。

学会誌と一緒に振込用紙を郵送しましたので、**12月末までに納入いただきますようお願いいたします**。この他、電信扱いにて納入される場合は、「会員氏名　納入される年会費」をご入力の上、以下の銀行口座へ納入ください。

郵便振替口座：00170 － 9 － 451310

他金融機関からの振込：〇一九（ゼロイチキュウ）当座 0451310　　加入者名：日本教育保健学会

［事務局］〒007-0894
札幌市東区中沼西４条２丁目１番15号
札幌保健医療大学内　日本教育保健学会事務局　欠ノ下郁子
TEL: 011-788-6804(内線1312)
e-mail：office@educational-health.jp

編集：広報委員会
（鎌田克信：東北福祉大学）
TEL/FAX: 022-３０１-１１４３（研究室直通）
e-mail：k-kamada@tfu..ac.jp